



# 出会い、 そしてともに変わる

全障研茨城支部  
**鈴木宏哉** さん

終戦当時、私は学徒動員された軍需工場で飛行機をつくり、結核に罹っていながら海軍兵学校や陸軍士官学校を受験するという徹底尾の軍国少年でした。終戦を迎えると戦時に反戦を貫き通して捕まっていた人たちが釈放され、新憲法制定の論議も盛んになります。世の中の急激な変わり様を目で見、習った日本史がでたらめだらけだったのを知り、凝り固まった軍国少年の価値観はがらがらと崩れていきました。終戦の翌年に入学した旧制高校では優れた教官に恵まれ、学生自治会結成やサークル活動の輪に入り、あらためて戦争とは何だったのかを見直していきます。

そのころ、東京大空襲で戦争孤児となった子どもたちを救援しようと、東京の学生たちが活動をしており、子どもたちを連れて山形の私たちの村にやってきました。村の学生有志で子どもたちを受け入れる活動が始まります。なかには障害のある子もいました。後になつて知ったのですが、その時期に滋賀でも糸賀一雄さんらの近江学園の実践が始まっています。このときの経験は、その後に障害者問題に係わることになった、一つの土台になっていったと思います。

旧制高校時代の活動をきっかけに、その後しばらく、社会的活動を続ける道を選びました。1956年にあらためて大学進学を考え、翌



2019年松野さん宅にて

写真右が鈴木宏哉さん。学生時代から親交のあった故・松野豊さん（元全障研宮城支部長）と

年、東京教育大学（現筑波大学）に編入します。心を支配する脳の働き、それを規定する社会との関係を研究したいと、心理学科の近接領域だった特殊教育（当時）で学ぶことを決めたのです。

入学した当日、学生自治会で出会ったのが、松本昌介さん（元『みんなのねがい』編集長）、清水寛さん（全障研顧問）、そして同じクラスの藤本文朗さん（全障研顧問）です。私はその後、障害者問題の基礎として、脳の理解が不可欠と考えて、脳波による研究を続けました。上記のみなさんとは、ことあるごとに連絡して、お互いの研究や実践を出し合いました。その積み重ねが、1967年の全障研結成の発起人としての連名へつながり、さらに現在のお互いの活動にもつながっています。

振り返ってみると、やはり若い世代とは大きく変わりうる世代です。とくに出会いと学びです。仲間とともに正しい道筋を見つけると、自分自身を大きく変えて生きるのだと思います。ぜひ全障研も新しい人を迎え、大きく広がっていってほしいと思います。（談）

すずき ひろや／1929年山形県生まれ。旧制山形高校卒業後1957年に東京教育大学教育学部（特殊教育専攻）に編入、同大学院実験心理学修了。医学博士。茨城大学教授、長野大学教授などを歴任。2017年まで全障研茨城支部長、日本てんかん協会茨城県支部代表。